

育てるべき資質・能力を明確にした小・中学校の“学びのリレー” — 国語科におけるパフォーマンス課題・ルーブリック開発 —

教職実践応用領域 授業づくり履修モデル
石田 竹司

I はじめに—研究の概要—

本研究実践は、小・中学校の国語科における学びの質（言葉による見方・考え方、資質・能力）や系統性を高めることを目的に、主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえ、「習得・活用（探究）」の学習プロセスを取り入れた学習課程を構成し、効果と意義を検証するものである。

新学習指導要領（2018年3月公示）では、知識・技能の習得と思考力、判断力、表現力等の育成のバランスを重視する現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成することが重視されている。国語科においても、目標及び内容の構成、学習内容の改善・充実、学習の系統性の重視、授業改善のための言語活動の創意工夫、読書指導の改善・充実を中心に内容が改訂された。

新学習指導要領の改訂を踏まえた授業実践に欠かせないのが、言葉による見方・考え方、資質・能力を的確に評価する方法である。子どもの習熟度、授業の流れ、単元全体の評価等、観点を明確にすることが必要である。このことは、学習過程や授業構成を見直すきっかけになると同時に、教科固有の深い学び、教科横断的で汎用的な学びを目指すことになる。また、その効果を検証していくことで、系統的な学びとカリキュラム・マネジメントについても考える契機となる。

II 研究の設定と経緯、背景及び目的

1 これまでの授業実践における課題

—小・中学校の勤務経験から—

これまでの小・中学校における9年間の指導を振り返ると、言葉を通して思考し、表現力や判断力等を高めるために、各教科等の指導のねらいを明確にした上で言語活動を適切に位置付けることを重視してきた。しかし、習得した知識・技能を関連付けるような本質的な問いを立てられていなかったり、評価基準が曖昧で丁寧な指導ができなかったりしたことで、言語活動そのものに抵抗感を抱く子どもが少なくなかった。このことは「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領

等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016年12月）においても指摘されている。小・中学校の国語科の課題については、「読解力の低下」「複数の情報を関連付けて理解を深めること」「伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすること」「複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること」「文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価すること」等である。

また、小・中学校の系統性や教科横断的な学び（汎用性）についても課題があると感じていた。学習内容や授業構成は系統的・段階的に上の学年につながっていき、子どもたちが螺旋的・反復的に繰り返して、学習できるように設定されなければならない。とりわけ小・中学校の円滑な接続は重要である。しかし、体験的な活動からの学びを大切にしていた小学校に比べて、学習内容を教師が子どもに一方的に教えるような授業が中学校では行われていたり、国語科で身に付けた知識・技能が他の教科の言語活動に十分に活かされていなかったりするのが現状である。これでは、子どもたちに9年間のつながりのある深い学びを保障できないのではないだろうか。

以上のことから「習得・活用（探究）」の授業モデル及び評価開発を行い、小・中学校の“学びのリレー”につながるような実践を提案する必要性を感じた。

2 新学習指導要領と新たな学び

新学習指導要領が目指す姿は、学校教育法が第30条第2項に定める、いわゆる学力の三要素（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」）に基づき、知・徳・体を総合的に捉え育成すべき資質・能力を、学習者の視点から3つの柱（「何を理解しているか、何ができるか」「理解していることを・できることをどう使うか」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」）によって改めて整理されている。

また、子どもたちの現状と課題を踏まえつつ、人間が学ぶことの本質的な意義や強みを改めて捉え直し、一人一人の学びを後押しできるよう、これま

で改訂の中心であった「何を学ぶか」という指導内容の見直しにとどまらず、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」までを見据えて学習指導要領等の改善が進められた。資質・能力を育むことを重視すると、子どもたちが「どのように学ぶか」が一層重要になる。学びの質を高めていくためには、「学び」の本質として重要となる主体的・対話的で深い学びの視点から、授業過程改善の取組を活性化していくことが必要である。

この主体的・対話的で深い学びにとって重要なのは、対話、グループ学習、討論といった学習活動の外形ではなく、授業において子供たちがアクティブ・ラーナー (Active Learner) になっているかであろう。各教科固有の深い学びに迫るために子どもたちが習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、問いを見出して解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かわなければならない。そのためには、「習得・活用 (探究)」という学習プロセスを見通して授業をしたり、子どもたちに学びを振り返

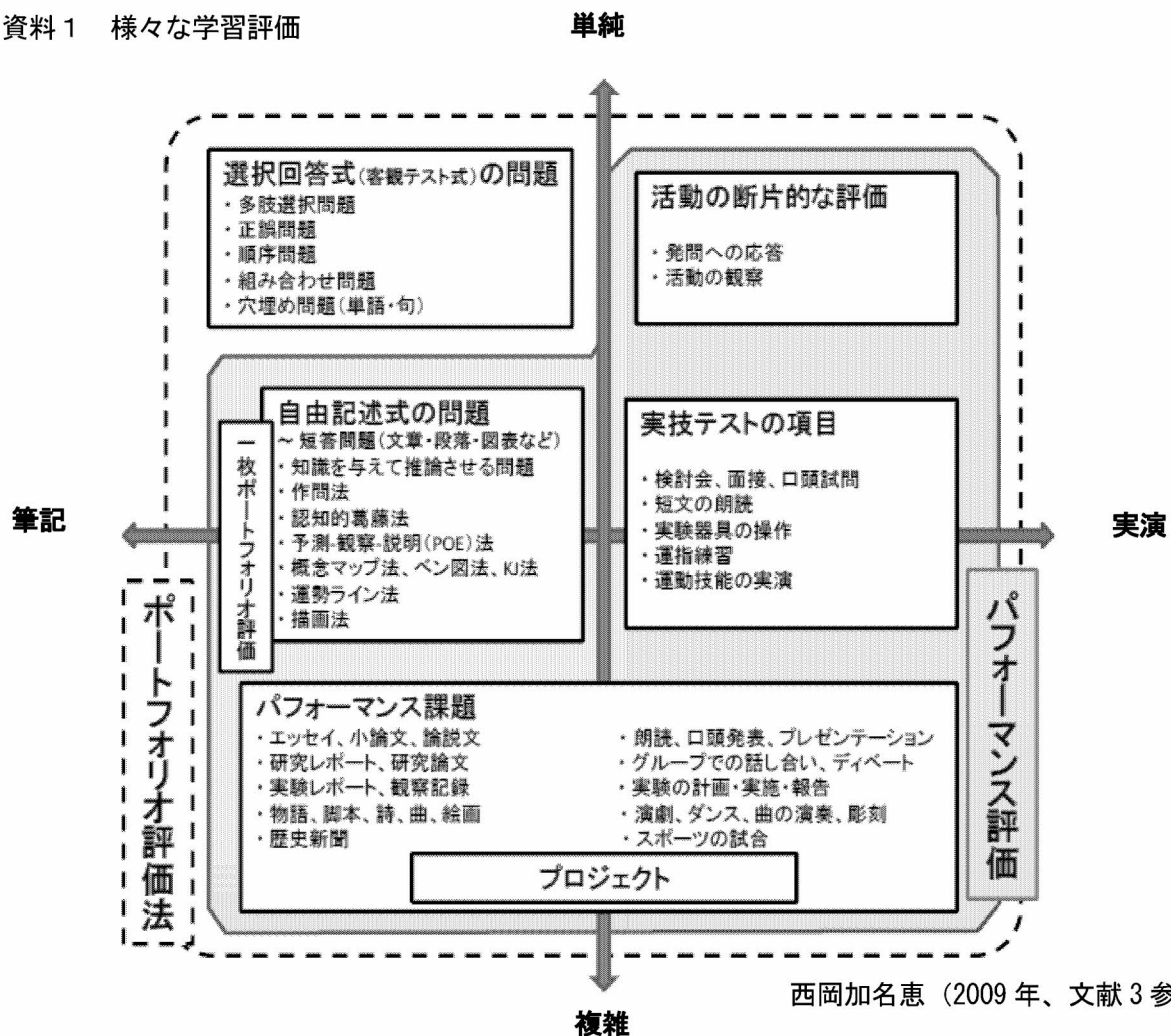
らせたりする必要がある。特に、国語科においては各教科等を貫く汎用性の観点からも、基礎・基本 (習得型学力)、発展や発信・交流 (活用型学力) 等の学習段階で系統的に言語力を育むことが重要である。

したがって教壇に立つ全ての教師が、目の前の子どもたちの発達の段階や発達の特性、学習スタイルの多様性や教育的ニーズと教科等の学習内容、単元の構成や学習の場面等の応じた方法について研究を重ね、ふさわしい方法を選択しながら、工夫して実践していくカリキュラム・マネジメントに取り組まなければならない。

3 資質・能力的確な評価

新学習指導要領では学習評価について、資質・能力の確実な育成につながるよう、目標と評価の観点を一致させるとともに、資質・能力を多面的・多角的に見取る評価の工夫が必要だとされている。しかし、活用 (探究) 段階の学力を指導したり評価した

資料1 様々な学習評価



西岡加名恵 (2009年、文献3参照)

りする観点が曖昧であるために、現場では混乱が生じるのではないだろうか。そこで、ウィギンズとマクタイ（1998年）が提案したような目標と評価方法を明確にした上で学習経験や指導方法を考えるという「逆向き設計」論の発想を取り入れて、「習得・活用（探究）」という学習プロセスを見通した授業構想と評価方法を明確にした指導計画が必要だと考える。知識・技能の習得に関しては筆記テストや実技テストが有効だが、知識・技能を総合して使いこなすような力を評価するにはパフォーマンス課題を用いることが必要だと考えられる。資料1に示すようなプレゼンテーション、レポート、論文等のパフォーマンス課題を用いる際には、ルーブリック（成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を記した記述語からなる評価基準表）に照らして評価することが適している。実際の子どもたちのパフォーマンスをふまえつつルーブリックを作成し、指導の改善に活かすことが重要である。

4 小学校教育と中学校教育の接続

小・中学校の接続については、義務教育9年間を通じて、子供たちに必要な資質・能力を確実に育むことを目指し、同一中学校区内の小・中学校間の連携の取組の充実が求められている。先の「答申」では小・中学校の接続の具体的な取組の工夫として、次のような例が挙げられている。①学校評議員会や地域学校協働本部の会議等の合同開催などの機会を通して、各学校で育成を目指す資質・能力や、それに基づく教育課程の編成方針などを、学校、保護者、地域間で共有し必要に応じて改善を図ること。②校長・教頭等の管理職が集まる機会を用いて、各学校で育成を目指す資質・能力や、それに基づく教育課程の編成方針などを共有し必要に応じて改善を図ること。③教職員による合同研修会を開催し、当該中学校区で9年間を通じて育成を目指す資質・能力との関係から、各教科等、各学年の指導の在り方を考えるなど、学習指導の改善を図ること。④同一中学校区内の小・中学校のPTA代表が集まる場や、各小・中学校のPTA総会の場等において、同一中学校区内の小・中学校の取組の共有や、保護者間の連携・交流を深めること。

特に、本校の生徒・保護者の現状や課題、ニーズを考慮して、③にあるように主体的・対話的で深い学びの視点から、授業過程改善を行うことを軸にした“学びのリレー”を実現することが必要だと感じている。

III 研究実践の構想と方法

1 「習得・活用（探究）」の学習過程モデル

従来の学習過程論（例、導入・展開・まとめ、問題解決学習の型等）は形式化しがちで、教科の本質的で深い学びや横断的・汎用的な学びの実現には至っていなかった。学習過程の質的な改善のために、子どもたちの学びの過程を新たな価値の創造や課題解決能力・高度な情報リテラシー等へ高めていくことや、知識・技能の習得と探究活動をつなぐ活用段階を基軸に学習過程を再構築する必要がある。以上の点を考慮すると、佐藤（2016年）が示した学習過程モデル（資料2）が有効な一視点になると考えられる。ここでは、習得段階は横断的・汎用的な学びを支える基礎と教科の本質的で深い学びにつながる基本を楽しくシンプルに教えるとともに子どもの意欲や興味を引き出すものとされている。活用段階では、習得した知識・技能を活かして自分の考えや解釈を言語化し、まとめていくことが求められている。そして評価・一般化で学習を振り返り、メタ認知能力が育つように指導を組み立てている。

このプロセスを踏まえた学習は、一つのテキスト形式にとどまらず、様々なテキスト形式（論理的文章や文学的文章等）の学習方法と評価論へも活用することができる。

2 パフォーマンス課題とルーブリック評価

先にも述べたように、発展的学習や探究型学習において、パフォーマンス課題を系統的・段階的に設定して、ルーブリックを作成することで、指導と評価の一体化につながり、資質・能力のバランスのとれた学習評価を行うことができる。

すべての単元でパフォーマンス課題を設定することは難しいので、本実践研究では論理的文章を中心に、その単元の本質的な問い（一問一答では答えられない論争的で探究を触発するような問い）を明確にして、核となるパフォーマンス課題を設定していく。また、ルーブリック（資料3）については、次のことに留意して作成した。①ルーブリック評価では論理的な記述（1・2）、論理的文章の解釈と考察（3・4）、人間的な学びへの観点（5）、メタ認知化（6）の6項目で構成した。②テキスト形式や内容の解釈・考察から論理的・批判的に考えを論述することで、学びをメタ認知化して深い人間的な学びになるような学習過程にした。③S（5）レベルには観点を示すことで、論說的文章を通した固有の学びと汎用性を明らかにした。また、系統的・段階的なパフォーマンス課題の例については別紙に示す。

資料2 国語科「習得・活用（探究）」の学習モデル（例）

学習段階とその位置		身に付けさせる言語力、その「習得」から「活用」「探究」へ
習得型学力	導入・基礎学習【習得1】 …全教科の基礎となる言語力を育てる学習段階	1 音読（内容理解の基礎、場面・段落の単位で）、2 話す態度や姿勢・話型、3 メモ・ノート指導、4 聞く態度や基礎（キーワード、具体例の数、引用・要約等）、5 漢字や概念・知識の理解と活用の基礎（語彙力、諺、故事成語等）
	基本学習【習得2】 …国語科固有の基本となる言語力を育てる学習段階	1 説明文（論理的文章）の読み方（書き方）の基本モデル学習、2 文学的文章（民話・民謡、物語・小説、ファンタジー、詩歌等）読み方（書き方）の基本モデル学習、3 伝記（記録）・ノンフィクション、随筆、鑑賞・批評・評論等の読み方（書き方）の基本モデル学習、4 話す聞く（伝え合い）の基本モデル学習
活用型学力	発展的学習【活用1】 …「考え・解釈」を論理的にまとめるための言語力を育てる学習段階	1 「自分の考え・解釈」をもつ学習…教材理解（受信）から説明力（発信）レベル、2 「自分の考え・解釈」を論理的にまとめる学習…自分の問題意識、立場・関心等を活かし、「習得」したことの再構成レベル（一貫した主張・構成の型の理解、キーワードの理解、引用・要約、タイトルの付け方、資料の意図的・効果的な活用等）
	発信・交流学习【活用2】 …「考え・解釈」を論理的に伝え深め合うための言語力を育てる学習段階	1 説明（発信）技術の基本モデル学習…論理的構成の型、引用・要約、非言語情報の活用等、2 「質の高い深い学び」のための基本モデル学習（習得）から活用・探究へ…情報の正確な理解から批評的に読み解き発信する、要約・引用の活用、メモ、質疑応答、立場の理解からよりよいものに改善・提案、新しい課題の発見等
評価・一般化	振り返り【学びの自覚、メタ認知化】 …自己評価、他教科等や生活に活かす「学びの一般化・汎用性」を獲得するための学習段階	1 学びの到達度（習得）レベル、2 課題解決能力につながる「思考力・判断力・表現力等」レベル、3 他者・情報から学ぶ「協働的な学び」（同僚性、協働性）レベル、4 他教科等や経験とのつながりを発見し活かす（学びの一般化・汎用性）レベル、5 課題発見と質の高い疑問・改善提案の工夫レベル、6 自己の生き方・価値観の形成、立場・専門性を見直し・再構築レベル等
探究型学力	探究型学習 …集団・組織の中で「自分の考え・解釈」を活かし、互いに学び合う学力を育てる学習段階	1 国語科における総発展学習、2 各教科・領域・体験・読書力等を活かした発展学習、3 学習者の関心・意欲、問題意識等を活かした主体的課題発見・解決学習、総合的な学習の時間等

（佐藤・森・有田 2016年、文献参4参照）

資料3 論理的文章の「テキスト形式」を踏まえたルーブリック（中3・批評文）

評価レベル	論理的文章の「テキスト形式」を踏まえたルーブリック評価（活用型）—「作られた『物語』を超えて」の批評文を例に一					
	1、論理的な構成の「型」を習得・活用し、わかりやすくまとめられているか。	2、伝えたい考えや思いをより効果的に表現する視点・方法を習得・活用できているか。	3、教材文のテキスト形式について、本質的な問いや解釈、考察等ができていないか。	4、教材文の内容について、本質的な問いと解釈、考察等ができていないか。	5、教材文のテキスト形式や内容についての解釈、考察を自分自身や社会と関わらせることができていないか。	6、学びを振り返り、多様な情報を読み解き、批判的・創造的にいかす方法を自覚しているか。
S (5)	筆者の主張を批評するとき、自分の主張に提案性があり、論理的である（5～6項目）。					
	(1)タイトルと主張 (2)序論・本論・考察・結論 (3)論理の一貫性等	(1)記録・文学の文体 (2)説明技術 (3)説得力（自分らしさ） (4)妥当性や本質の吟味等	(1)論理の展開 (2)構成 (3)図表、データの活用等	(1)論理的文章の批評性 (2)人間・社会・自然との関わり等	(1)人間的な学び (2)探究等	(1)メタ認知 (2)一般化 (3)提案性等
A (4)	筆者の主張を批評するとき、自分の主張と根拠の関係が適切である（4～5項目）。					
B+ (3)	筆者の主張を正確に読み取り、批評文の型に合わせて書くことができる（3項目）。					
B- (2)	筆者の主張を読み取れているが、批評文の型に合わせて書くことができない（3項目）。					
C (1)	筆者の主張を読みとれず、論述が不十分である（1～2項目）。					
D (0)	記述できない（0項目）。					

（作成 石田竹司・佐藤洋一、2016年）

IV 授業実践

1 単元名「データが教えてくれる動物たちの真実」（論理的文章・中2）

(1) 単元の内容について

本教材「生き物が記録する科学—バイオロギングの可能性」では、バイオロギングという新しい研究方法が明らかにしたペンギンの生態を紹介されている。この研究方法の魅力や可能性を示していくことを通して、理解していたはずの地球や生き物たちの姿が、実は偏ったものであることに気付かせてくれる。説明のしかた、文章の展開に注意して読むことで、子どもたちに地球や生き物に対する見方を考え直すきっかけを与えてくれる教材である。

また、日本の子どもたちの課題である自立・自律した生き方、創造的で批評的な判断力や構成力、提案・発信力等（思考力、判断力、表現力等）を身に付けるために、本教材の終末には科学的なレポートを書くというパフォーマンス課題を設定する。国語科の教科としての本質的な問いだけでなく、理科等との関連を明確にして、汎用的な課題として位置付けている。ルーブリックを作成して、

指導と評価の一体化を図る。以上の構想に基づいて設計した単元計画の例が資料4である。単元の最後のパフォーマンス課題の解決に必要な知識・技能を徐々に習得させていき、それらを組み合わせさせて活用させることを求める。

(2) 論理的文章の読み方（書き方）の基本モデル学習（習得）

筆者の主張や文章の論理的な構成を正しく読み取り、自分の表現に活かすことができるように学習シートを工夫した。学習シートA（資料5）では、筆者たちが行った調査とその結果から明らかになった事実を整理した。その際、科学的な用語の理解や文章と図表との関係についても着目できるように支援した。また、学習シートB（資料6）では、文章を序論・本論・考察（一般化）・結論のまとまりに分け、それぞれに小見出しを付けることで文章構成に迫ることができるようにした。本論においては、それぞれの終末に小まとめ（考察）があることにも着目させた。調査結果から得られたデータによって明らかになった真実

や新たな疑問を一つずつ読み解いていくことで、子どもたちが科学的に探究することの楽しさにも気付けるように支援した。

資料4 パフォーマンス課題を組み込んだ単元計画

<p>第1時 【ねらい】学習の見通しをもつ。 【生徒の活動】学習課題を立てて、パフォーマンス課題に至るまでの見通しをもつ。</p>
<p>第2時 【ねらい】筆者の主張を読み取る。 【生徒の活動】筆者が行った調査内容をまとめ、明らかになったことや筆者の主張を読み取る。</p>
<p>第3時 【ねらい】文章構成を読み取る。 【生徒の活動】序論・本論・考察・結論のレポートの型を基に文章構成図をつくる。</p>
<p>第4、5時 【ねらい】パフォーマンス課題を解決する。 【生徒の活動】筆者の主張や論の展開を参考にし、科学的なレポートを書く。</p>

(3) 科学的なレポートを書く学習 (活用)

習得段階で読み取った筆者の主張や論理的な文章構成を活かして科学的なレポートを作成した。日本バイオリギング研究会が発表しているウミガメやアザラシに関する図表等のデータをいくつか

提示して、子どもたちが選択できるようにした。パフォーマンス課題は習得していることを活用して解決する必要があるため、子どもたちには負担が大きい可能性がある。また、作文等の言語活動に抵抗感を抱いている子どもがいるため、意欲的に取り組むことができるような課題提示の工夫が求められる。そこで、科学的なレポートは設定、展開1・2、考察、結論という構成に合わせて作成するように指導した。レポート原稿(資料7)には、項目を明示することで、書くことが苦手な子どもへの支援とした。また、レポートを評価するためにルーブリック(資料8)を作成した。ルーブリックは資料3にある中学3年「批評文」につながるように項目を再構成した。記述語については、客観的な表現になるように本校の国語科教員で過去のレポートを分類して、それぞれのレベルの特徴を基に作成した。また、子どもたちには表現を簡潔にしたものを3つのレベルで提示した。

(4) 振り返りシートの活用 (学びの自覚、メタ認知化)

毎時間の振り返りには、確かな習得のためにチェックリストを作成した。そこでは、学びを記述と3段階のレベルで自己評価できるように工夫した。毎時間の授業が単元の終末に設定されているパフォーマンス課題に段階的に迫っていることを捉えやすいように、振り返りシート(資料9)には、ルーブリックを掲載した。

資料5 学習シートA (習得)

<p>技の名前・分類 くわしく</p>	<p>2 アデリーペンギンの潜水行動</p> <p>○() () う鳴き声を合図に 一言に飛び込む。 ○疑問 ()</p>	<p>1 エンペラーペンギンの潜水行動</p> <p>○() () ○最大潜水深度 メートル ○最大潜水時間 分以上 ○疑問 ()</p>	<p>1</p> <p>筆者たちが行った調査とその結果からどのようなことが明らかになったのか、整理しよう。 【キーワード】疑問・答え、図表やグラフ</p>	<p>A</p> <p>【課題】 生物が記録する科学——バイオリギングの可能性 佐藤 克文 名前</p> <p>二年 組 番</p>
	<p>調査内容と疑問</p> <p>○最大潜水深度 メートル ○最大潜水時間 分以上 ○疑問 ()</p>	<p>調査結果</p> <p>◎ペンギンが潜る穴を人工的に設けて行った場合 ○結果… () ◎自然の状況で行った場合 ○結果… () ○様子… ()</p>	<p>明らかにしたこと</p>	
	<p>↓潜水 () () だけを二致させていた。</p>	<p>◎結果… (四) (五) から ()</p>		

資料6 学習シートB (習得)

② 右の表を参考に、文種構成図をまよめよう。	結論	本論	序論	区分
				形式記号
				キーワード
				小見出し

① 文章を序論・本論・結論(要約)のまよりに分けよう。さらに、まよりに分けてそれぞれをまよりのキーワードを見つけてつけよう。

資料9 振り返りシート

科学的なレポートを書こう

レベル3 自分の考えや主張の説明に、独自の視点や論理性、説得力がある。
 レベル2 筆者の主張や伝え方の工夫を正しく理解し、序論・本論・結論・考察の型で書くことができる。
 レベル1 筆者の主張や伝え方の工夫を正しく理解し、データを読み取って、レポートを書くことができる。

ステップアップ 振り返りシート 単元の勉強にしよう！

課題4
(振り返り)

① 目的

② 筆者の意図(伝え方の工夫)をまよめよう。

課題3
(振り返り)

① 目的

② 本文構成をまよめよう。

課題2
(振り返り)

① 目的

② 図や表、グラフと本文の関係性をまよめよう。

課題1
(振り返り)

① 目的

② 筆者が行った実験をまよめよう。主要な材料をまよめよう。

資料7 科学的なレポートの型

むすび	まとめ	なか2	なか1	はじめ	構成
結論	考察	展開2	展開1	設定	書き方のポイント
☆データの分析から、「自分が考えたこと」「や」伝えたいこと」をまよめよう。	☆選んだデータに関する「動物たちの真実」をまよめよう。 ・データから、読み取ったこと(意味づけ・解釈)	小まよめ② ・データから分かることを受けて、考察を書く。最終的な考察につながるようにまよめよう。 【選んだデータ】	小まよめ① ・データから分かることを受けて、考察を書く。最終的な考察につながるようにまよめよう。 【選んだデータ】	話題・問いの提示 (一) 読み手が興味をもつような書き出しの工夫。 (二) 問いや課題を提示する。	

資料8 科学的なレポートのルーブリック

評価レベル	論理的文章の「テキスト形式」を踏まえたルーブリック評価(活用・探究型) —「生物が記録する科学—バイオロギングの可能性」のレポートを例に—					
	1、論理的な構成の「型」を習得・活用し、わかりやすくまよめられているか。	2、伝えたい意図や主張をより効果的に表現する観点・方法を習得・活用できているか。	3、教材文のテキスト形式について、本質的な問いや解釈、考察等ができていないか。	4、教材文の内容について、本質的な問いと解釈、考察等ができていないか。	5、教材文のテキスト形式や内容についての解釈、考察を自分自身や社会と関わらせることができているか。	6、学びを振り返り、多様な情報を読み解き、批判的・創造的にいかす方法を自覚しているか。
S (5)	自分の考えや主張の説明に、独自の視点や論述、説得力、深さが見られる(5~6項目)。					
	(1)タイトルと主張 (2)序論・本論・考察(結論) (3)論理の一貫性等	(1)記録・文学の文体 (2)説明技術 (3)説得力(自分らしさ) (4)妥当性や本質の吟味等	(1)論理の展開 (2)構成 (3)図表、データの活用等	(1)科学的レポートの独自性等 (2)人間・社会・自然との関わり等	(1)人間的な学び (2)探究等	(1)メタ認知 (2)一般化 (3)提案性等
A (4)	自分の考えや主張を説明するとき、論理的な整合性と、分かりやすく、的確な説明ができていない(4~5項目)。					
B+ (3)	筆者の主張や伝え方の工夫を正しく読み取り、序論・本論・考察・結論の型で書くことができる(3項目)。					
B- (2)	筆者の主張や伝え方の工夫を正しく読み取れているが、論理的な文章の型で書くことができない(3項目)。					
C (1)	筆者の主張や伝え方の工夫を正しく読みとれず、論述が不十分である(1~2項目)。					
D (0)	記述が断片的、部分的である(0項目)。					

(作成 石田竹司・佐藤洋一、2017年)

V 考察

1 新学習指導要領と新たな学びの探究

パフォーマンス課題に解答した64名(2学級)を分析対象とする。

今回は、国語科固有の深い学びに迫るために子どもたちが習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、問いを見出して解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かうモデル授業を設定した。そこでは、国語科の汎用性の観点からも他教科等にも広がる言語力の育成を目指した。

評価基準としてルーブリックを作成し、その項目や観点、記述語の妥当性・系統性を検討することも目的であったため、各評価レベルの人数だけでなく、各項目を達成している人数や割合も明らかにした。

まず、「1、論理的な構成の「型」を習得・活用し、わかりやすくまとめられているか」に当てはまるのは42人(65.6%)であった。これは、第3時に、本文の文章構成について、学習シートを使って習得していたからだとみることができる。また、レポートを作成する際に、文章構成の型が記載してある学習シートや原稿用紙など、各自の意欲や理解度に合わせて選べるようにしたことも学びのステップとして有効だった。文章構成を意識してレポートを作成することは当たり前のこととして子どもたちが認識していたようだ。

次に、「3、教材文のテキスト形式について、本質的な問いや解釈、考察等ができているか」や「4、教材文の内容について、本質的な問いと解釈、考察等ができているか」に当てはまるのは、それぞれ47人(73.4%)、53人(82.8%)であった。どちらも多くの子どもたちが達成している。レポートを作成するという難易度の高いパフォーマンス課題に取り組む中で、これまでに習得してきたテキスト形式やテキスト内容を子どもたちが振り返ったためだと考えられる。習得・活用(探究)という学習過程を取り入れてカリキュラムを構成することで、自然と学んだことが復習され、活用されるということが出来る。このことは、資料11にあるように「筆者の主張を深く読み取った」の件数が多いことからわかる。

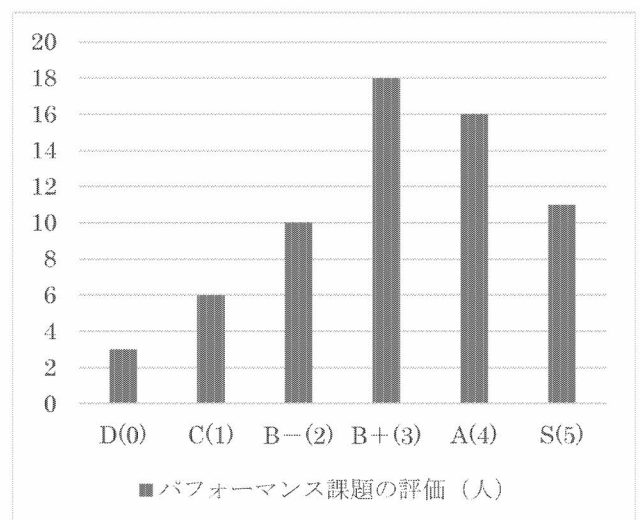
さらに、「6、学びを振り返り、多様な情報を読み解き、批判的・創造的に活かす方法を自覚しているか」に当てはまるのは33人(51.6%)であった。このことは、資料8にあるようなステップアップシートを使って、学びを振り返り、相対的・批判的にレポートを作成することができたから

だと考えられる。子どもたちに馴染みのなかった「一般化」については、教材文を扱う際に「ある事物の特徴を抽象し、他の事物にも当てはまること」等、丁寧に繰り返して説明をした。

「2、伝えたい意図や主張をより効果的に表現する観点・方法を習得・活用できているか」に当てはまるのは18人(28.1%)で課題が残った。資料11からも「自分の考えをわかりやすくまとめた」と振り返るに留まり、説得力のあるレポートには至っていない。説得力をもたせるための具体的な説明技術の基礎・基本が習得されていないことが原因の一つだといえる。新学習指導要領でも小学校から系統的・段階的な言語活動に取り組みめるような例が示されている。特に、作文等の書くことについて、丁寧な指導が求められる。

また、「5、教材文のテキスト形式や内容についての解釈、考察を自分自身や社会と関わらせることができているか」に当てはまるのは、14人(21.8%)であった。学びが探究にまで深まらないのは、パフォーマンス課題の内容に切実性がないからではないだろうか。今回は、レポートを作成するという難易度の高い課題であったため、考察や結論が明解であるデータを教師が準備して、子どもたちに選ばせた。テキスト形式やテキスト内容を確実に習得できている子どもにとっては、与えられたデータではなく、自ら調査したり、データを集めたりすることも可能だったのであろう。子どもたちが自分や社会との関りを強く感じることが出来るような課題の提示が必要である。

資料10 ルーブリック評価の実情と課題



資料 11 生徒によるパフォーマンス課題の自己評価

自己評価の記述内容	(件)
文章構成の型を意識した	7
自分の考えをわかりやすくまとめた	29
根拠と主張のつながりを明確にした	14
説得力のある文章に心掛けた	7
誤字脱字などに留意した	9
筆者の伝え方の工夫がわかった	2
筆者の主張を深く読み取った	24
自分なりの表現をした	1
合計	93

2 パフォーマンス課題とルーブリック評価

習得したことを活用（探究）するためのパフォーマンス課題に取り組みせ、それを評価する基準としてルーブリックを作成した。データを正確に読み取り、科学的なレポートを作成するという難しい課題に対して子どもたちは前向きに取り組んだが、課題もうかがえた。

まずは、どの評価レベルにも達成できていない項目がある点である。例えば、結論の段階に一般化や探究に関する記述が不十分であっても、基本的なレポートの文章構成が整い、データや筆者の主張が正しく読み取れていればS評価になる。ま

た、資料 12 にあるように「人間に慣れてしまうと、動物を危険な目にあわせてしまうこととなります。人間はそのことよく考えて行動しなくてはならないと思います」と結論の記述に一般化や提案性のあるレポートであっても、データの読み取りや考察等が不適切であるためにC評価になっているレポートもある。今回は、ルーブリックの全ての項目を同じ比重で扱ったため、評価レベルには十分に表れないレポートのよさやオリジナリティ、課題があった。単元や教材文、子どもたちの実態に応じて、項目の比重を変えてカリキュラムを構成したり、評価を行ったりする必要がある。

また、子どもたちに基礎・基本が十分に定着していないことは前述のように課題である。今回のように学習シートを数種類用意して、子どもが選べるような支援や、書いてまとめる大切さ（必要性）や楽しさに気付かせるような支援を系統的・継続的に行う必要がある。さらに、読んだり、書いたりする言語力がある程度身に付いている子どもたちは、今回の実践を通して十分にその力を伸ばすことができただろうか。最も評価レベルが高いS評価のレポートにも課題が残っている。彼らの主体性や課題意識を尊重して、それぞれの言語力に応じた課題設定やカリキュラムが必要である。

資料 12 生徒が書いたレポート（C 評価）

結論	まとめ	本論 2	本論 1	序論	
人間に慣れてしまうと、動物を危険な目にあわせてしまうことになりす。人間はそのことよく考えて行動しなくてはならないと思ひます。 危険を教へてあげられるのは、人間だけなのです。	二つの調査により得られたデータから、人間に深く関わりと警戒心が薄れてしまうことがわかりました。	私は、この調査から、飼育されていたタイマイには天敵がないことがわかりました。	このデータから分かることは二つあります。 まず、飼育されていたタイマイは一日中途切れることなく、活動していることがわかりました。 なぜ、夜の間も受信されているのでしょうか。	私は、この調査から、野生のタイマイは休んでいるときに天敵に襲われないために、サンゴや岩に隠れているのだらうと考えました。	みなさんは、タイマイについて知っていますか。 タイマイはウミガメの一種です。

VI 結論

本研究は習得・活用（探究）という学習プロセスを取り入れた授業構想と評価方法を明確にしたモデル授業を通し、教科固有の深い学び（見方・考え方）から教科横断的で汎用的な学びを構成する小中学校の学びの系統性（学びのリレー）を高める教育課程の構築を目的とした。

バイオリビングという新しい研究方法を扱った本教材は、子どもたちにペンギン等の動物の生態に関する素直な感動をもたらすだけでなく、科学的で論理的な文章を読んだり書いたりする際のモデルになった。授業においては、2、3時間目で基礎・基本を楽しく、確実に習得させることで、活用（探究）にあたるパフォーマンス課題の解決に必要な「パーツ」の学習が促されたといえる。パフォーマンス課題の結果からは、多くの子どもたちが習得したことを活かして科学的なレポートを作成し、教材文のテキスト内容やテキスト形式の読み取りをさらに深め、科学的で論理的な思考、判断、表現をしたことがわかった。総合的な学習の時間や理科等のレポート作成にもつながる本実践は国語科が育むべき汎用的な資質・能力を改めて指摘するものになったといえるだろう。

また、子どもたちの確かな習得には、小学校段階でどれだけテキスト形式の「型」を読んだり、書いたりしているかが大きく関わっている。別紙資料にあるように、小学校の3、4年生から螺旋的・反復的に繰り返して学習する中で定着が図られなければならない。これまでの学習指導要領は、例えば「言語活動」を横軸に教科横断的なつながりの強化を目指してきた。新学習指導要領では、資質・能力の育成や、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の視点を一つの縦軸として、小学校や中学校、高等学校等の系統的なつながりを深めることが意図されている。この改訂をきっかけに、教壇に立つ私たち教師は授業過程を見直し、子どもたちの資質・能力を育むカリキュラム・マネジメントに取り組んでいく必要がある。

〈主要参考文献（一部）〉

- 1 文部科学省 中央教育審議会「審議のまとめ」（2016年8月）、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016年12月）、文部科学省 「新学習指導要領」（2017年3月）、文部科学省 「新学習指導要領解説書 国語編」（2017

- 年6月)
- 2 三鷹市教育委員会「三鷹市立小・中一貫教育校各教科のカリキュラム概要」（2013年）、春日井市立出川小学校「学習規律の徹底とICT活用の有効活用」（2015年）、品川区教育委員会「品川区の小中一貫教育」（2015年）
- 3 教育課程研究会編著『「アクティブ・ラーニング」を考える』（東洋館出版社2016年）、G. ウィギンズ・J. マクタイ著（西岡加名恵訳）『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』（日本標準2012年）、D. ハート著（田中耕治監訳）『パフォーマンス評価入門—「真正の評価」論からの提案』（ミネルヴァ書房2012年）、西岡加名恵・石井英真・田中耕治編著『新しい教育評価入門 人を育てる評価のために』（有斐閣2015年）、西岡加名恵著『教科と総合学習のカリキュラム設計 パフォーマンス課題をどう活用するか』（図書文化2016年）、西岡加名恵編著『「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価 アクティブ・ラーニングをどう充実させるか』（明治図書2016年）
- 4 佐藤洋一編著『国語科「習得・活用型学力」の開発と授業モデル（全4巻）』（明治図書2011年）、佐藤洋一・森和久・有田弘樹著「国語科におけるアクティブ・ラーニングの開発と課題—『質の高い深い学び』につなげる活用型テキスト—」（『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第1号』、愛知教育大学2016年）、佐藤洋一著「国語科におけるアクティブ（ディープ）・ラーニングの実践課題—何のために、何をどうすることが『新しい資質・能力』を育むのか—」（『国語教育研究2016年2月号』日本国語教育学会編）

【付記】

愛知教育大学教職大学院において、このような学びの場を与えていただいた愛知県教育委員会、尾張教育事務所、江南市教育委員会にお礼を申し上げるとともに、校長先生をはじめとする勤務校教職員の皆様には研究や実践、実習に対してご理解、ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

また、課題実践実習・研究を進めるにあたり、温かくご指導いただいた佐藤洋一先生、有働裕先生をはじめとする教職大学院の諸先生方に厚くお礼申し上げます。

教職大学院での多くの学びを今後の教育活動に活かし、子どもたちや先生方、地域へ還元できるように努めてまいります。